

# 丹後半島周辺の受口状口縁土器の動態

中居 和志

## 1. はじめに

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての古墳出現期は、全国的に土器の交流が活発化する時代である。この古墳出現期において、「近江系土器」と呼ばれる土器がある。

近江系土器という場合、通常は受口状口縁甕・鉢・壺や手焙形土器を指す。実際、近江地域において受口状口縁甕などは他の形態を圧倒する比率で用いられており、これらの土器様相の中心地であることは間違いない。しかし、受口状口縁をもつ土器は、山城地域、伊勢地域、美濃地域など、多くの地域で完全に在地の土器として定着している。そのため、地域名を冠してしまうと、近江地域外で在地化した受口状口縁をもつ土器の意味を見失う可能性がある。そのため、これらの土器は形態から受口状口縁土器と呼ぶのが適切である。

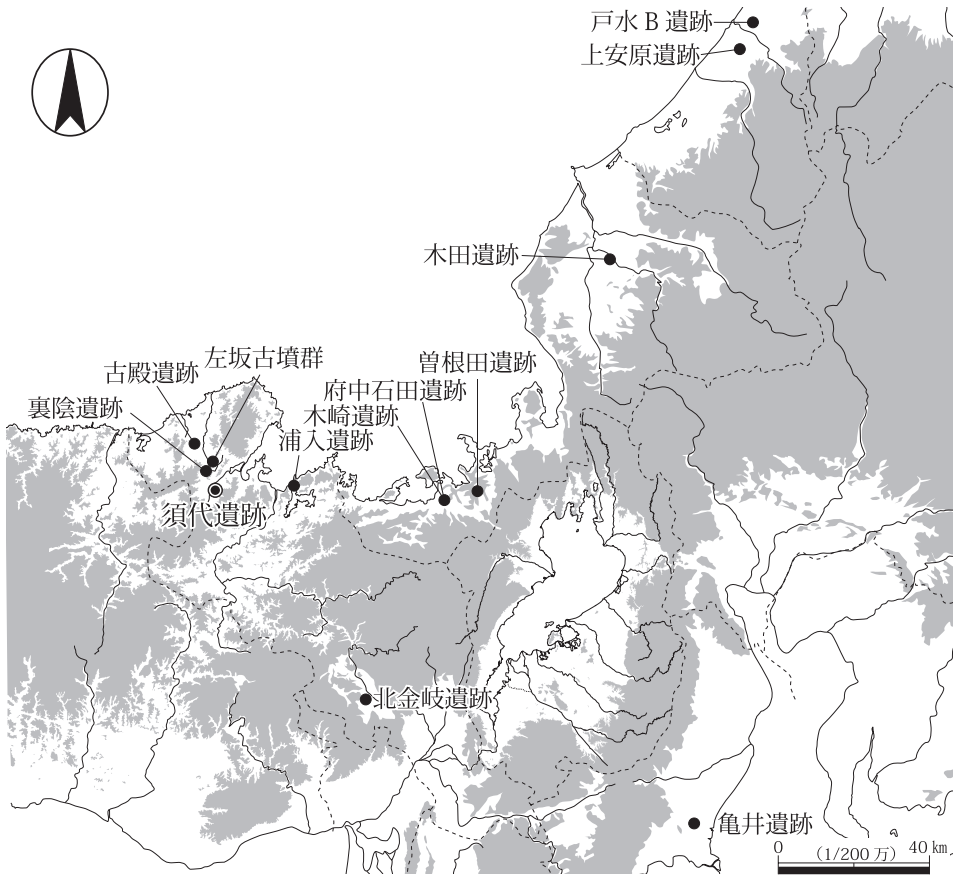
さて、受口状口縁土器は、古墳出現期にいち早く広域に拡散する土器であり、濃尾平野の八王子古宮式<sup>(注1)</sup>をはじめ各地の土器様相に大きな影響を与えた土器である。受口状口縁土器の拡散については、小竹森氏や近藤広氏が検討し、筆者も時期別の傾向を示したことがある。しかし、周辺各地域での詳細な検討はこれまでに行われていない。

そこで本論では、これまで未報告であった丹後半島周辺(以下丹後地域)出土の甕を提示し、丹後地域における受口状口縁土器の様相とその意味について検討していきたい。

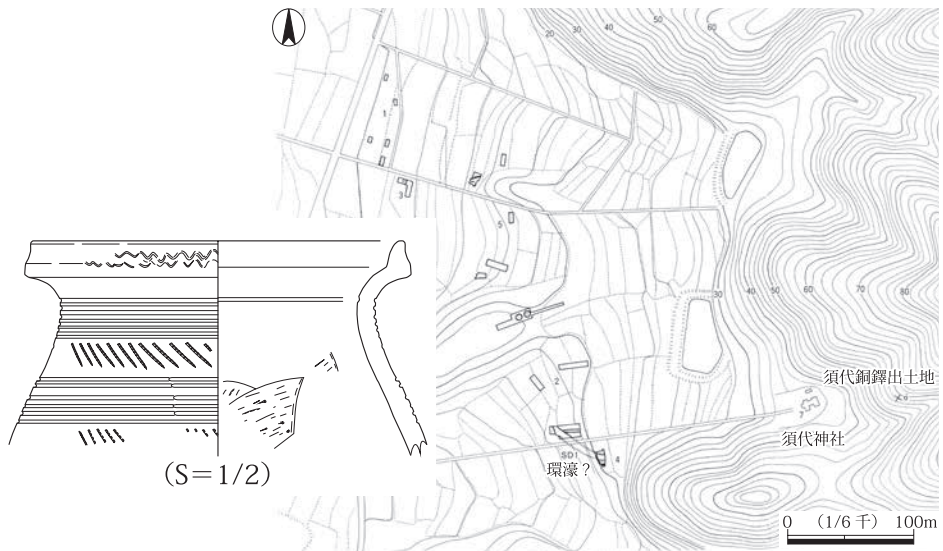
## 2. 須代遺跡出土の受口状口縁甕

須代遺跡は、与謝野町明石池田に所在する遺跡である。これまでの発掘調査によって、弥生時代中期から弥生時代後期、古墳時代後期から平安時代を中心とした集落遺跡であることが判明している。遺跡の南端に近い調査地からは幅約5m、深さ約1mの溝が検出されており、環濠の可能性が指摘されている<sup>(注3)</sup>。遺跡の東側丘陵裾に位置する須代神社背後の丘陵斜面からは、国の重要美術品に指定されている流水文銅鐸が出土している。

今回取り上げるのは、須代遺跡内にあたる須代神社境内で1973年に表採された受口状口縁甕である(第2図)。この甕は、口縁部径9.8cmに復元でき、残存高は5.7cmである。色調は、内外面とも明赤褐色で、断面の中心部は黒灰色となる。胎土には0.5mm大のチャート質の堆積岩類をやや多く含んでいる。口縁部は、緩やかに外反する頸部に立ち上がる受け部を



第1図 本論関連遺跡



第2図 須代遺跡全体図と表探の甕(平面図は注3より一部改変)

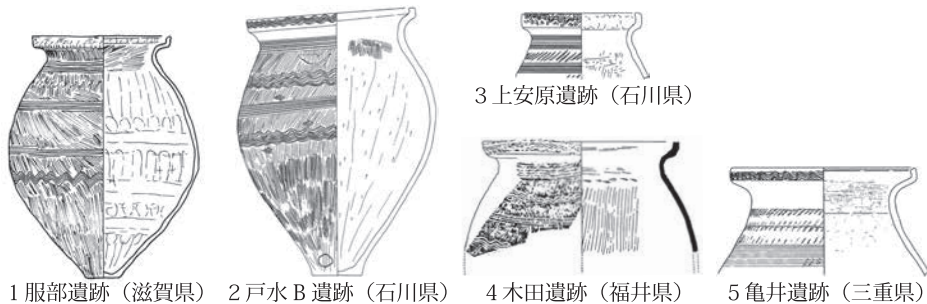
付加する。口縁端部は面をもたず、わずかに外側につまみ出し気味となる。口縁部外面には3条単位の波状文を施す。頸部以下には、6条単位の直線文と10点単位の列点文を交互に繰り返す。体部内面はケズリ調整を施し、口縁部はナデ調整となる。

この受口状口縁甕は、須代神社境内表採であるという以外の詳細は不明である。しかし、当遺跡の盛期が弥生時代中期末から後期初頭であることからみて、この甕の時期もほぼ同時期の可能性が高い。なお、胎土は在地の土器と比べて大きな差異はない。

### 3. 須代遺跡出土甕の類例

須代遺跡出土の受口状口縁甕は、口縁部外面に波状文を施している。口縁部外面に波状文を施す甕は、丹後地域の在地の甕には存在しない。また、当該期の近江地域の受口状口縁甕は口縁部外面に列点文を施し、波状文は体部の多段施文帯の下部に位置するのが通例であり、波状文を施すものは少ない(第3図-1)。

口縁部外面に波状文を施す受口状口縁甕としては、中期後葉の石川県戸水B遺跡出土例が代表的である(第3図-2)<sup>(注4)</sup>。戸水B遺跡出土の受口状口縁甕は、口縁部外面に波状文、頸部以下には直線文と波状文を交互に施す。外面はタタキのちタテハケ調整、内面はケズリ調整で仕上げしており、凹線文系甕と同様の技法で製作していることが判明している。一方、中期後葉における近江地域の甕は、凹線文系甕と在地の受口状口縁甕で製作技法から明確に分離している。そのため、戸水B遺跡の報告書では、若狭・丹後地域からの影響で成立した可能性を指摘する。また、北陸地域における同様の甕は石川県金沢市上安原遺跡や福井県福井市木田遺跡からも出土している(第3図-3・4)<sup>(注5)</sup>。土器の時期は、上安原遺跡例が戸水B遺跡と同様に中期後葉、木田遺跡例は後期前葉の土器が主体の大溝からの出土である。上安原遺跡例は、口縁部や体部の施文、内面の調整方法も須代遺跡例と同様であり注目できる。ただし、口縁部は大きく立ち上がる形態となり、同時期における近江地域の受口状口縁甕の形態とより類似している。



第3図 近江地域の受口状口縁甕と口縁部波状文の甕(S=1/8)

一方、伊勢地域にも少数ながら口縁部外面に波状文を施す受口状口縁甕が存在する(第3図-5)。三重県津市亀井遺跡出土例では、体部の施文が直線文と列点文の組み合わせになる点が須代遺跡例と類似するが、体部内面がハケ調整である点が異なっている<sup>(注6)</sup>。

このように、近江地域を含めて口縁部に波状文を施す受口状口縁甕は存在するものの、その数量は少ない傾向が強い。その中で、加賀地域でも金沢市周辺に波状文を施し、内面の調整も同様な受口状口縁甕が多いことは、須代遺跡の受口状口縁甕が加賀地域の影響を反映している可能性が高いと評価できる。

#### 4. 丹後地域出土の受口状口縁土器

丹後地域で出土した受口状口縁土器は非常に少ない。これまで確認できている受口状口縁土器は、古殿遺跡と浦入遺跡から受口状口縁甕、古殿遺跡、左坂古墳群、裏陰遺跡から手焙形土器が出土しているのみである。現状では受口状口縁壺や鉢は確認できていない。

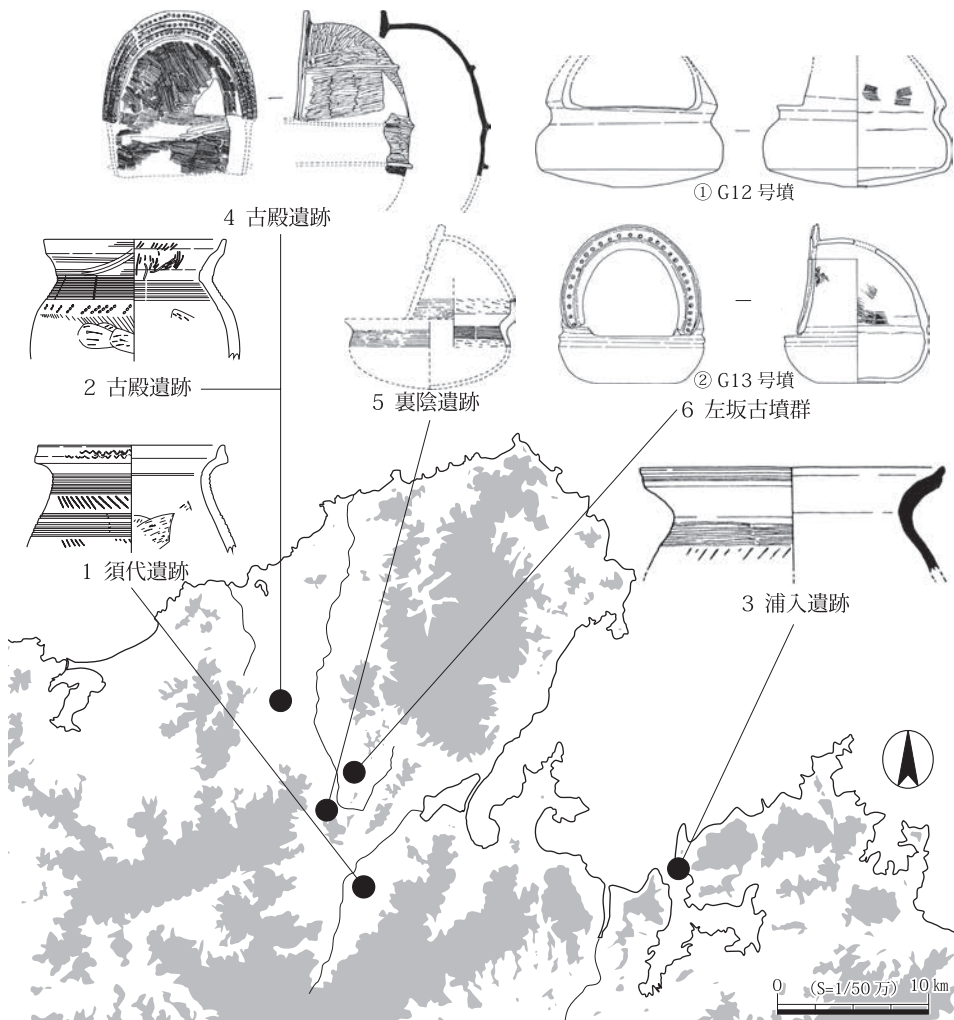
古殿遺跡は京丹後市峰山町に所在し、小西川左岸の丘陵端部に位置する。受口状口縁甕は、昭和61年の2次調査検出の溝SD02-2から出土しており、同一層位からは山陰系有段口縁甕や小型器台が出土している。SD02は河道とされており、大量の木製品が出土している。受口状口縁甕は、口径9.8cmと小型の甕で、口縁部は緩やかな受口状となり、端部にはやや面をもつ(第4図-2)。口縁部ヨコナデで肩部にクシガキ直線文を施し、その下部にクシガキ列点文を施す。口縁内面にはクシガキ工具の当たり痕があり、肩部内面にはヨコハケを施す。口縁部の形状は十分な受口形状ではないが、肩部施文が直線文と列点文の組み合わせである点は受口状口縁土器に通有であり、受口状口縁土器と判断して問題はない。

古殿遺跡出土甕の時期は、他の土器の時期はおおよそ畿内地域の庄内式・布留式併行期を中心としているが、受口状口縁土器に列点を施す施文の組み合わせは、近江地域においては畿内地域の庄内式併行期前半には消滅しており、周辺地域から出土する受口状口縁土器でもその傾向は変わらない。また、庄内式併行期に残る受口状口縁土器の列点はハケ・ヘラ工具による列点が基本となっており、当事例のようにクシ工具を用いた列点は弥生時代後期の中で消滅する。つまり、当事例は庄内式併行期以前に遡る土器であり、同時に出土した土器群に混入した可能性が高い。なお、同時に出土している小型器台は、極細ヨコミガキに特徴づけられる小型精製器種B群ではないことから庄内式併行期に比定できる。

舞鶴市の浦入遺跡は、舞鶴湾口部の東側に形成された浦入湾に立地し、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡である。受口状口縁甕が出土したのは、N地点流路後SD01からである。SD01出土土器の時期は、弥生時代後期末にあたる西谷2式とされている<sup>(注7)</sup>。この

受口状口縁甕は、口径15.8cmの中型の甕で、口縁部外面には擬凹線が巡り、肩部にはクシガキ直線文・列点文を施す(第4図-3)。受口部の立ち上がりが低く、外面に擬凹線が存在することは、近江地域の受口状口縁甕とは異なっており、擬凹線文を多用する丹後地域の影響を強く受けていることがわかる。しかし、古殿遺跡例と同じく、直線文と列点文を組み合わせた施文は受口状口縁土器に通有であり、わずかに受口を志向する口縁部の形状と合わせて、受口状口縁甕と判断して問題はない。クシ状工具を施文に使用している点は、西谷2式の時期と相違はなく、他の土器群と同時期の甕と判断できる。

手焙形土器については、4点が確認できる。古殿遺跡では、包含層から覆い部と体部の



第4図 丹後地域出土の受口状口縁土器(甕：1/4、手焙：1/8)

一部が出土している(第4図-4)。覆い部は端面を上下に拡張し、端面に低い突帯と円形浮文を同心円状に施す。覆い部外面と鉢部には水平に突帯を巡らせるが、受口状になるべき鉢部口縁も突帯状となっている。京丹後市大宮町の裏陰遺跡では、包含層から鉢部と覆い部の接続部が出土している(第4図-5)。小片であるため全形や時期は判別できないが、鉢部口縁が受口状とならないことはわかる。なお、包含層中の出土遺物は、弥生時代後期後半が中心である。京丹後市大宮町の左坂古墳群では、G12・13号墳からそれぞれ1個体ずつ出土している(第4図-6)。これらの土器は、庄内式併行期新段階に相当する浅後谷南2式の標識資料である<sup>(注8)</sup>。G12号墳出土の手焙形土器は、覆い部上半は欠損しているが端部に面はない。鉢部の口縁は単純なくの字状となり、底部はわずかに小さな底部をもつ。一方、G13号墳出土の手焙形土器は、覆い部端部を上下に拡張し、端部に突帯と円形浮文を施す。鉢部の口縁はわずかに受口状の痕跡をとどめ、底部は丸底がつぶれた平底となる。形式的な差異からみると、G12号墳例のほうが底部の存在から古い形態といえる。しかし、G12号墳例は鉢部の受口状口縁が存在しておらず、G13号墳例は覆い部の形態は近江地域に近似して鉢部口縁も受口状を残すものの底部形態が異なるなど、どちらも近江地域の手焙形土器とは違いがあり、明確な時期差をこれらの事例のみで判断するのは困難である。

これらの手焙形土器は、その形態から近江地域からの直接の影響関係をみることはできない。そのため、左坂古墳群例にみられるように、相伴する畿内地域由来の土器群の一部として丹後地域に流入した可能性が高い。また、その時期も裏陰遺跡例を除けば庄内式併行期新段階から布留式併行期初頭に位置付けることができ、丹後地域に手焙形土器が流入する時期もかなり限定的であったといえそうである。

このように、丹後地域でこれまでに確認できている受口状口縁土器はわずかであり、その土器も甕と手焙形土器に限定される上にいずれも近江地域の受口状口縁甕・手焙形土器と異なる特徴を有している。このことから丹後地域は、近江地域から直接土器が持ち込まれるような状況ではなく、また少量の在地化した土器は存在するものの、在地の土器様相に大きな影響を与えることはなかったことがわかる。

次に丹後地域に隣接する若狭地域、丹波地域の様相をみていく

##### 5. 若狭地域と丹波地域における受口状口縁土器

若狭地域は、それぞれ特徴的な土器様相をもつ近江地域と丹後地域の中間に位置し、さらに北陸地域からの影響もみられる地域である。そのため、若狭地域の土器様相は3者の土器様相が混在する状況が推定されていたが、十分な資料に恵まれていなかった。近年、舞鶴若狭自動車道の建設などに伴い大規模な発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時

代初頭までの資料が報告されるようになった。そうした資料の中でも、受口状口縁甕がまとまって確認できる3遺跡の資料について報告書を元に数値化した(第5図)。

弥生時代後期前半にあたる若狭町の曾根田遺跡では、受口状口縁甕が16点(17%)を占める。<sup>(注9)</sup>一方、ほぼ同時期にあたる小浜市の府中石田遺跡では、1点(4%)にとどま<sup>(注10)</sup>る。また、弥生時代後期後半にあたる小浜市の木崎遺跡では、1点(4%)となる。<sup>(注11)</sup>これらの資料からは、若狭地域内でも時期や遺跡によって差異がありながらも、受口状口縁甕が一定量は存在していることがわかる。こうした傾向は、量が少ないものの受口状口縁壺・鉢にも当てはまることから、受口状口縁土器全体の傾向といえる。

丹波地域は、丹波北部地域の福知山綾部盆地と、丹波南部地域の亀岡盆地では、受口状口縁土器の受容が大きく異なる。福知山綾部盆地は、基本的に丹後地域の土器影響圏内にあたっており、受口状口縁土器は非常に少ない。こうした傾向は、篠山盆地でも同様である。一方で、亀岡盆地では受口状口縁土器が在地の土器として定着している。亀岡市の北金岐遺跡では、庄内式併行期段階において、受口状口縁壺が壺全体の約20%、受口状口縁甕が甕全体の約37%を占めている。<sup>(注12)</sup>

このように、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての若狭地域では、量の多少はありながらも一定程度の受口状口縁土器が継続して存在することがわかる。同様に、丹波南部地域の亀岡盆地でも受口状口縁土器は在地化して定着している。そのため、受口状口縁土器の出土量が圧倒的に少ない丹後地域と比較すると、隣接地域である若狭地域や丹波南部地域と、丹後地域や丹波北部地域との差異がいかに大きいかかわかる。

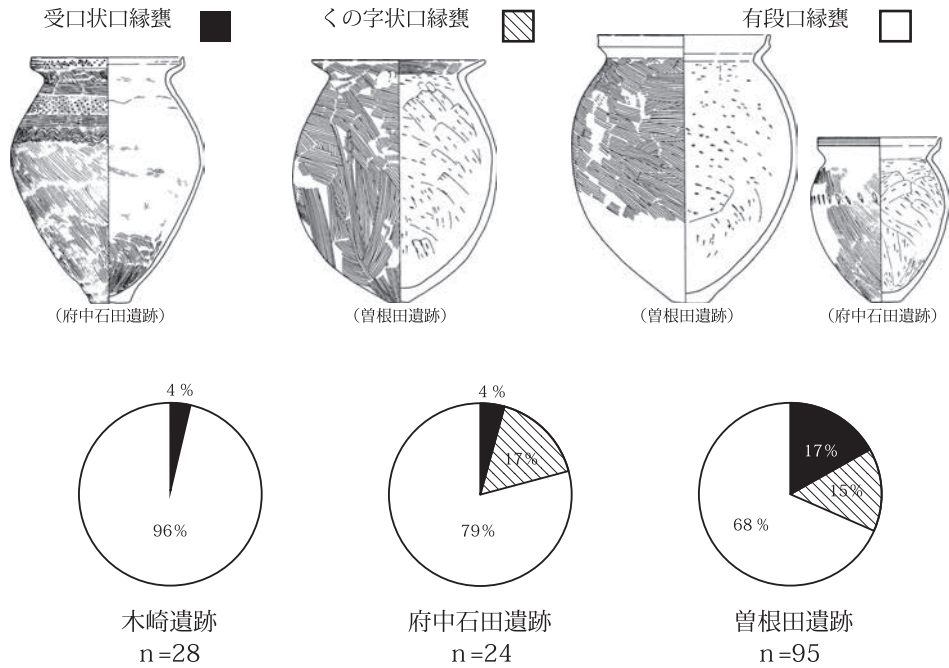
## 6. 受口状口縁土器の分布と丹後地域

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての受口状口縁土器の分布範囲は、西は韓半島から、東は新潟や北関東に及んでいる。<sup>(注13)</sup>これらの受口状口縁土器が拡散する時期は、大きく分けて3つの段階に分かれる。

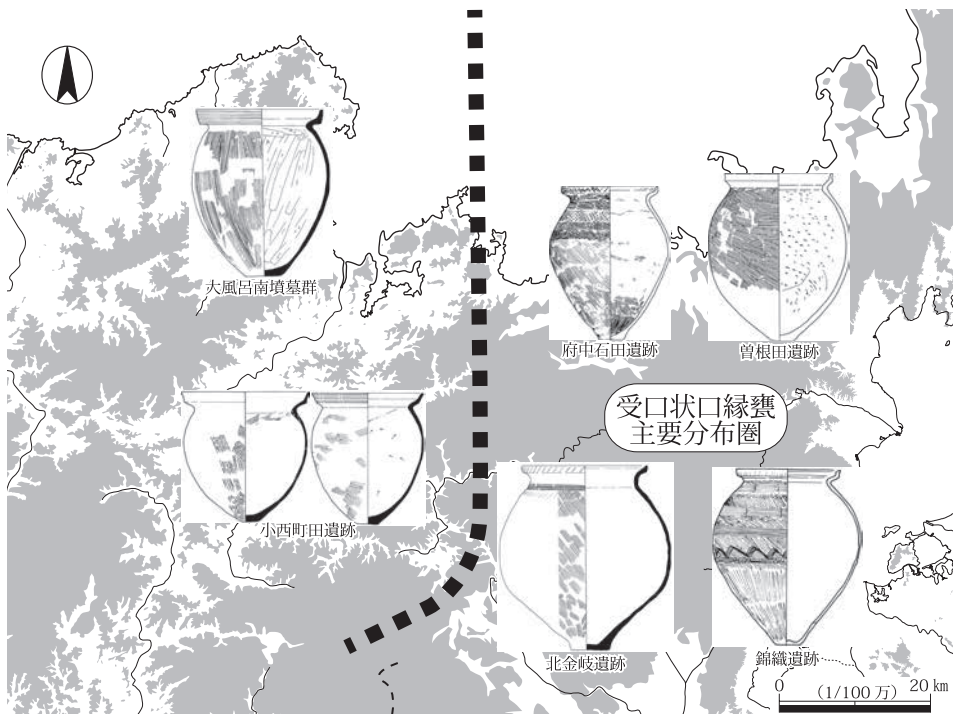
第1段階の弥生時代後期前半は、近江地域を中心としつつ福井平野や伊勢湾岸などの地域に濃密に受口状口縁土器が広がる段階である。この段階には各地域とも近親性の高い受口状口縁土器を高率で使用する。

第2段階の弥生時代後期後半は、受口状口縁土器がさらに広範囲に拡散する。新潟や韓半島から出土している受口状口縁土器はこの段階のものである。一方で、各地域の受口状口縁土器は在地化が進み、地域ごとの差異が大きくなる傾向が強い。

第3段階の庄内式併行期は、受口状口縁土器の出土地域は前段階と大差ないものの、その数量は近江地域以外で激減する。しかし、各地で出土する受口状口縁土器は、近江地域



第5図 若狭地域の甕と甕の比率(甕：S=1/8)



第6図 丹後地域の甕と受口状口縁甕の主要分布圏(甕：S=1/10)



から搬入の個体が多くなる傾向がある。

こうした3段階に丹後地域で出土した受口状口縁土器を当てはめてみる。第1段階に相当するのが今回報告した須代神社境内表採の甕で、第2段階に相当するのが古殿遺跡、浦入遺跡の甕、そして第3段階に相当するのが各遺跡出土の手焙形土器である。

第2段階ほど広範囲に拡散しない第1段階の受口状口縁甕が丹後地域に存在しているのは、受口状口縁土器の情報が丹後地域に波及していたことを示している。しかし、隣接する若狭地域や丹波南部地域と比較して、丹後地域に存在する受口状口縁土器の総量は圧倒的に少ない。それは、丹後地域の土器受容が排他的であったことを示している(第6図)。

土器交流が活発化する当該期において、特に活発な土器移動をみせるのが東海系土器である。<sup>(注14)</sup> 受口状口縁土器とは拡散する時期に違いがあるものの、その拡散範囲は受口状口縁土器よりも広範囲である。しかし、そうした東海系土器も丹後地域では赤坂今井墳丘墓などごく少数の出土数にとどまっている。<sup>(注15)</sup> そして、日本海側における東海系土器の分布は、受口状口縁土器の分布と同様に丹後地域以東に分布する傾向にある。つまり、丹後地域の土器様相は、排他的で独自性が強いだけでなく、受口状口縁土器や東海系土器群も含めてより西側へと拡散するのを食い止めている状況といえる。こうした状況は、当該期における日本海側各地域の中でも丹後地域の特異な点であろう。

この丹後地域の様相に近いのは、近江湖南地域である。湖南地域には、他地域からの土器は搬入されているものの、その量は湖東地域などと比べて少なく、また大和地域をはじめとした遠隔地へと搬出されている土器は地理的に遠い湖東地域の土器が多いという特徴がある。

このように、土器交流が活発化するという古墳出現期ではあるが、地域ごとの濃淡があることがわかる。今回検討していないが、遺跡ごとの濃淡の存在も確実である。そして、このまだらな状況のまま古墳の出現を迎えていくことには、大きな意味があるものと考えられる。

## 7. おわりに

本論では、須代遺跡出土の受口状口縁土器から、丹後地域周辺の受口状口縁土器の動態を検討してきた。丹後地域に認められる排他性は、湖南地域をはじめ多くの地域に存在するであろう。布留式併行期中段階には、こうした地域性は消滅し、広域に土器様相が統一されたかのようにみえる。しかし、詳細に検討していけば前段階以来のまだらな実態を継続している可能性が高い。受口状口縁土器のように、広域に分布する土器を検討することで、こうした側面をとらえることが可能になると考える。今後も、より広範囲での受口状

口縁土器の動向について検討を進め、その意味を考えていきたい。

今回掲載の須代遺跡出土土器については、与謝野町教育委員会の加藤晴彦氏に掲載を快諾していただいた。末筆ながら記して感謝を申し上げる。

(なかい・かずし = 京都府教育庁文化財保護課)

- 注1 矢作健二・赤塚次郎「八王子古宮式と近江湖南型甕」(『研究紀要』第4号 愛知県埋蔵文化財センター)2003
- 注2 小竹森直子「近江の地域色の再検討2 - 周辺地域における近江系土器について -」(『紀要』第2号 滋賀県文化財保護協会)1989  
近藤 広「弥生後期における受口状口縁土器の様相 - 近江の地域区分と他地域への影響 -」(『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と地理』西田弘先生米寿記念論集刊行会)2001  
中居和志「古墳出現期における受口状口縁土器群の動態」(『立命館大学考古学論集VI 和田晴吾先生退職記念論集』立命館大学考古学論集刊行会)2013
- 注3 加悦町教育委員会『須代遺跡第1次発掘調査概要』1988  
加悦町教育委員会『火口遺跡・須代遺跡Ⅱ発掘調査報告書』1991
- 注4 久田正弘ほか『金沢市戸水B遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002
- 注5 小西昌志『上安原遺跡Ⅱ 金沢市文化財紀要193』金沢市埋蔵文化財センター2003  
木田遺跡発掘調査団編『木田遺跡』福井市教育委員会1976
- 注6 藤田充子『亀山遺跡(第2・3次)発掘調査報告書』津市教育委員会2009
- 注7 高野陽子「丹後地域」(『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター)2006
- 注8 前掲注7
- 注9 田中祐二ほか編『福井県埋蔵文化財調査報告第138集 曾根田遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2013  
田中祐二ほか編『福井県埋蔵文化財調査報告第150集 曾根田遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2014
- 注10 田中祐二ほか『福井県埋蔵文化財調査報告第121集 府中石田遺跡』2011福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 注11 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『福井県埋蔵文化財調査報告第122集 木崎遺跡』2011
- 注12 中居和志「古墳出現期における受口状口縁土器群の動態」(『立命館大学考古学論集VI 和田晴吾先生退職記念論集』立命館大学考古学論集刊行会)2013
- 注13 武末純一ほか「金海會峴里貝塚出土の近江系土器」(『古代文化』第63巻第2号)2011
- 注14 東海系土器には、濃尾平野、伊勢地域、三河地域の土器などを含み、多様性があり移動の内容も複雑である。それを踏まえた上で、本論ではまとめて東海系土器と総称しておく。
- 注15 岡林峰夫・石崎善久ほか『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』峰山町教育委員会 2004